6 血液内科部

◆ 1　診療体制と方針

（1）診療体制と特徴

血液内科で扱う白血病、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、骨髄増殖性疾患などの造血器腫瘍は、治癒を目指せるのが大きな特徴である。抗がん剤以外に、放射線、幹細胞移植（骨髄、末梢血、臍帯血）、さらに、分子標的療法、モノクローナル抗体、サリドマイド、ボルテゾミブ、アザシチジンなどの新規薬剤の治療が急速に進歩しており、今まで難治と考えられていた患者さんも、治癒可能になりつつある。

当院は地域がん診療連携拠点病院で、悪性リンパ腫の診断と治療効果判定に必須とされるPET/CTを備えている。病棟には個室の無菌室8床、幹細胞分離装置があり、自家末梢血幹細胞移植を行っている。見晴らしの良い５階には24床の外来化学療法センターがあり、リクライニングシートでリラックスして治療が受けられる。

当科の特色はチーム医療である。毎週行う多職種カンファレンスには、血液内科医3～4名と病棟看護師、薬剤師の他に、化学療法センターのがん化学療法看護認定看護師、がん薬物療法認定薬剤師、緩和ケアチームが参加し、医学的なことだけでなく、看護、緩和、在宅、経済的な問題などを解決している。さらに放射線科、歯科口腔外科、検査、輸血、リハビリ、ME、ソーシャルワーカーと連携したチーム医療により、患者さんの治療と支援を行っている。さらに、当院には25床の緩和ケア病棟もあり、単なる化学療法、移植施設としてではなく、診断から緩和ケアまでの全人的な医療を行うことを目標としている。

治療方針としては、エビデンスに基づいた最先端の治療を行なっており、臨床試験にも積極的に参加している。造血器腫瘍診療ガイドラインやNCCNガイドラインに従うだけでなく、患者さんごとの社会的背景も考慮し、Quality of lifeを重視した医療を実践している。体調が良いときはできるだけ在宅生活を目指し、外来治療にも重点をおき、在院日数は他施設よりも短くなっている。

（2）がん腫ごとの診療方針

急性白血病、慢性白血病については、JALSG（日本成人白血病研究グループ）や分子標的療法のダサチニブ、ニロチニブ等の臨床試験に参加している。同種移植が必要な患者さんは、県内の移植施設と連携している。

悪性リンパ腫については、確立された標準治療のCHOP-R療法やABVD療法を行う。再発した場合は、新薬のベンダムスチン、ブレンツキシマブ、モバムリズマブや幹細胞移植、放射免疫療法を行っている。
多発性骨髄腫については、若年者ではボルテゾミブの治療後に幹細胞移植を行い、さらにレナリドミド、ポマリドミドを使い、今後保険適応となる新薬を導入する予定である。

◆ 2　がん診療実績

（1）年度ごと10年間のがん種別症例数

がん種別の入院延件数（表１）、がん種別新規患者数（表２）を示す。いずれも年々増加している。中区

表１ がん種別入院延件数

年 度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
急性白血病	55	78	94	66	72	69	82	58	66	61
悪性リンパ腫	68	74	87	102	71	74	122	92	110	137
多発性骨髄腫	24	43	34	34	27	45	34	36	38	36
骨髄異形成症候群	25	47	63	63	59	32	36	20	24	53
慢性白血病	0	12	22	0	5	4	9	8	4	8
骨髄増殖性疾患	2	3	0	2	0	10	5	3	6	3

表2 がん腫別、新規患者数

年 度	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
急性白血病	17	22	23	17	19	20	20	23	19	21
悪性リンパ腫	24	29	36	27	23	23	31	22	42	45
多発性骨髄腫	11	10	7	7	8	13	11	10	14	14
骨髄異形成症候群	6	3	8	9	6	1	9	7	16	16
慢性白血病	0	6	5	0	1	4	3	4	2	4
骨髄増殖性疾患	6	1	2	2	0	6	3	3	5	4

周辺は横浜市の中でも高齢化が進んだ医療圏で、高齢者の造血器腫瘍患者さんが多いのが特徴である。

（2）がん種別、生存曲線

急性骨髄性白血病（急性前骨髄球性白血病を除く）の症例のうち、64歳以下でJALSGプロトコールに準じた治療を行った症例の生存曲線を示す（図1）。症例数は29例で、50%生存期間は649日である。急性前骨髄球性白血病の症例数は11例で、予後は良い（図2）。

図1 急性骨髄性白血病の生存曲線

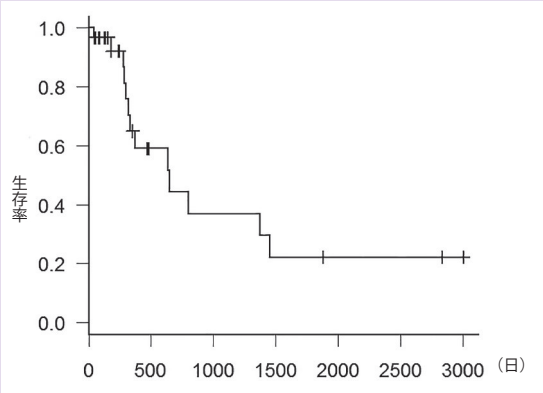
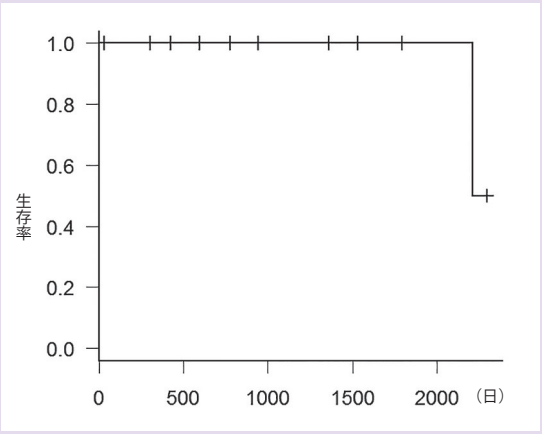


図2 急性前骨髄球性白血病の生存曲線



（3）学会・論文発表件数（2005年4月から2015年3月まで）

学会、研究会：39 （学会18、研究会21）
論文：9

（4）臨床研究参加件数

臨床研究参加件数は、JALSGが20件、JALSG以外が18件、合計38件である。

◆ 3 今後の展望

高齢化に伴い、南部医療圏の造血器腫瘍患者数は増加していく。一方、多発性骨髄腫などの造血器腫瘍については、抗体薬などの分子標的薬や新規作用機序の新薬が次々と登場し、治療の選択肢が広がっていく。今後さらにエビデンスや患者さんのニーズに合わせ、地域の先生方との連携をさらに深めて、地域に根付いた質の高い医療を血液内科チームで実践しますので、よろしくお願い致します。

＜文責者名：山本　晃＞

血液内科チームのメンバー
血液内科医師（前列左より、齊藤、山本部長、中村、迎）